空にのこったおばあさん

モード＆デロス・ラブレイス＝清水真砂子訳

南アメリカ民話

あかね書房

こども世界の民話5
空にのこったおばあさん

＊訳　者
清水　真砂子（しみず　まさこ）
＊発行者
岡　本　陸　人
＊印　刷
錦明印刷株式会社
新興印刷製本株式会社（本文組）
＊製　本
土開製本株式会社
＊発行所
株式会社 あかね書房
東京都千代田区西神田 3-2-1 〒101
電話 東京（263）0641〈代〉
1972年4月5日第4刷

■訳者紹介
清水真砂子（しみずまさこ）
1941年北朝鮮に生まれ、46年春引き揚げ。静岡大学卒業後、高校教諭となり現在に至る。論文に「『水の子』と児童文学の問題」「『メアリー・ポピンズ』のファンタジーについて」ほか、訳書に『大きいゾウと小さいゾウ』などがある。

■画家紹介
上矢　津（かみやしん）
1942年東京に生まれる。モダンアート展に出品を続けながら、装幀デザイン、イラストレーションに活躍。児童図書のさしえにSF「テミスの無人都市」「セブンの太陽」ほか、絵本に「ドン・キホーテ」「おはなしプレゼント」などがある。

NDC 933
ラブレイス，モード＆デロス
空にのこったおばあさん　ラブレイス夫妻著　清水真砂子訳
あかね書房　1972
124p　23cm　（こども世界の民話5）

©1970年 Printed in Japan 訳者との契約により検印なし

8397-12005-0027

空(そら)にのこったおばあさん

モード＆デロス・ラブレイス 著＝清水真砂子 訳
上矢 津 絵

日文 701720181

——5——南アメリカ編

あかね書房版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

もくじ

空にのこったおばあさん……7
お客さまのおくりもの……53
犬になった女の子……85
あとがき……122

表紙デザイン／JAC
イラストレーション／上矢 津

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈著者紹介〉

モード夫人

ラブレイス（Lovelace）夫妻は、アメリカ北部ミネソタ州の出身で、奥さんのモード（Maud）さんは一八九二年、御主人のデロス（Delos）さんは一八九四年生まれ、共にミネソタ大学に学び、一九一七年結婚しました。おとなだけでなく、子どもたちのためにも、すぐれた作品を書き、なかでもモードさんの『ベトシー・テイシー』シリーズは有名です。デロスさんは、長年、すぐれた記者として活躍しましたが、一九六七年に亡くなりました。

空（そら）にのこった おばあさん

空にはあながあいている?!

これは、インディオのワラウ族のあいだにつたえられているお話です。

ワラウ族の祖先が、とおいむかし、それまですんでいた空の上の国から、どうやって、この地上におりてきたのか、というお話です。

青い空のどこにも、あながあいていないのに、いったい、どうしておりてこられたのかと、ふしぎにおもうひとがあるかもしれませんね。ほんとうに、われめでもあったら、空の上の国だって、のぞいてみることもできるでしょうに。

でも、たしかにむかしは、空には、あながあいていたのです。いいえ、ワラウ族のひとびとの話では、こうしてお話ししているいまだって、あなは、ちゃんとあるのだといいます。では、どうして、あなは見えないのかって？

それは、ワウタアという名まえの、ふとったおばあさんが、そのあなを、ぴっちりふさいでしまっているからなのです。

ワラウ族のほかのひとたちがみんな、オコノロテという男の子をせんとうに、つなをつたって、この地上におりてきてから、もう、なん百年にもなるというのに、このワウタアばあさんときたら、そのあいだ、ずっと、空のあなにはまりこんで、みうごきひとつしないでいるのです。

空のわかもの、オコノロテ

さて、オコノロテというのは、ワウタアばあさんのまごで、赤銅色のはだをした、十四くらいの男の子でした。かみの毛は、まっすぐにうつくしくのび、黒いひとみは、くりくりとよくうごき、こしには、いつも、色あざやかなぬのをまいていました。

オコノロテは、部族のみんなと、空の上の、とある村にすんでいました。

村の家は、まるたをふねのようなかたちにくみあわせてたてたもので、やねは、ヤシの葉でふいてありましたが、どれもたいてい小さくて、じめじめしたうすぐらいところに、ゆかを高くしてたっていました。（ワラウ族は、そういうところがすきだったのです。）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

家のまわりのヤシの木は、すくすくと、きもちよくのび、さきには、おうぎがたの葉がしげり、ひとびとのすぐあたまの上まで、おおいかぶさってきていました。

村のはずれには、ほかの家よりいくらか大きなたてものがあって、村の行事はぜんぶ、そこでおこなわれていました。もういっぽうのはずれには、こぢんまりとした、かんじのよい家がありましたが、それが、オコノロテがワウタアばあさんといっしょにすんでいる家でした。

家の中には、いくつかハンモックがつってあり、それがベッドのやくめもすれば、こしかけのやくめもしていました。そのほかに、パンをやくのにつかうひらたい石と、土なべが一つおいてありました。ワウタアばあさんは、スープづくりの名人で、このなべで、すばらしくおいしいスープをつくってくれたのです。

なべにはいつも、とろとろとスープがにえていましたが、このスープがなくならないように、ざいりょうにする鳥をとっては、家へもちかえるのが、オコノロテのしごとでした。オコノロテは、このしごとがたのしくてしようがありませんでした。このとしごろの子どもにしては、鳥をうつのが、とてもじょうずだったからです。

ところで、オコノロテは、鳥ばかりとっていました。鳥しかとるものがなかったのです。空の上の国では、生きものといえば、鳥と人間だけでした。シカもバクもヒョウもサルも、そのほか、どんなけだものも、ここにはいませんでした。川があっても、さかなは一ぴきもいませんでしたし、ぬま地にも、ツルもいなければ、トカゲやワニもいませんでした。

オコノロテのはっけん

さて、ある日のこと、いつものように、朝はやく、弓矢をもって、鳥をとりにでていたオコノロテは、おもわず、はっといきをのみました。ふしぎな鳥が、目にとまったのです。あざやかな、そのにしきのようなはねといい、すがたかたちのよさといい、これまで見たどんな鳥もおよびません。

オコノロテのむねはおどりました。どうしても、その鳥がほしいとおもいました。スープにだって？　とんでもない。

「たべるなんて、できるかい。」オコノロテはおもいました。「あいつをうって、そのはねで、かんむりをつくるんだ。そうしたら、世界じゅうのかりゅうどがあつまったって、おれのにかなうやつはあるまい。」

オコノロテは、そっと、鳥にちかづきました。矢をつがえようとしました。けれども、そのしゅんかん、鳥はぱっととびたって、べつの木にうつってしまいました。

オコノロテは、すぐあとをおいました。と、また、鳥はとびたってしまいました。おなじことが、なんどもくりかえされました。とうに、朝ごはんの時間はすぎてしまいました。それでも、オコノロテは、ひっしで鳥をおいつづけました。

森をぬけました。のはらもぬけました。これまで、こんなにとおくにきたことはありません。でも、オコノロテは、このまばゆいばかりにうつくしい鳥を、みうしなうくらいなら、死んだほうがましだとまでおもうのでした。

いつか、日は西にかたむき、夕風もふきはじめました。そろそろ、夕はんのじぶんでしょう。オコノロテは、ふっと、じぶんをまっていてくれる、おばあさんのことをおもいました。

そのときです。ふと気がつくと、ねらっているえものが、すぐ目のまえにいるではありませんか。鳥は、見あげるように高い、モーラの木の下のほうのえだにとまって、やすんでいます。

オコノロテは、矢をつがえました。かまえました。いきをころしました。そのとたん、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com